

東アジア日本語教育・ 日本文化研究学会報告

新羅大学院特別教授 藤井茂利 189

学会休憩時間内に口頭発表会場に行くべく白江先生と私二名は寡黙のまま食堂を後にした。途中何も話はせず発表会場を目差した。本館3階5階に7会場に分散している。50名入る程度の小部屋に分散し各発表会場には発表者が7名程度割り当てられている。自分の発表会場を探し回り何とか見付けて入室する。

白江先生は黙ったまま教室中央の前から5列目あたりに着席された。私は受け付け事務を担当しているバイト学生との連絡事務があり急いで1階玄関口まで急いだ。懇親会費の集計が合わないとの連絡を受けたためである。ともかく暫くはそのままにして置くようにと通知して発表会場に戻った。

発表会をするには司会者がいる。7発表会場毎に各司会者を決めることになっている。会場にもよるが最初の発表者

のは最後に発表予定者がして最初の発表者から次の発表者の司会をする形と一応決めている。私の発表の時は最後に発表する崔光準副会長が司会を下さったが、私は発表が終わるとすぐ受付係と懇親会費の問題、学会費納入者と金額の付け合わせ確認の仕事が待っている。発表会場での司会

は免除してもらうことにした。私としては毎回のこのようになっているが、発表会場が同室になる会員は毎回異なっており、その度毎に断りを言

い了解をもらうことになる。今回の口頭発表の題目は前々から考えていた通り

『万葉集』(巻五)の中の百濟系仮名

と題しレジュメに記載した。'18年韓国仁川大学、'19中国大連大学での発表の締め括りをするようと考えた内容である。レジュメには、

『万葉集』(巻五)では或る

音に、例えば「ア」の音に「阿」の漢字を使うが他の巻では「安」の漢字が使用されている。何故かかる現象が生じたのか考察してみる必要があるように思われる。

『万葉集』に使用されている音仮名は一般に平安朝期の「平がな」の源流になった漢字が多く使われているが、(巻五)では、例えば「阿・意・那・斯」など『古事記』『日本書紀』に使用した漢字が使用されている。この事に関して『巻五』の表記者が古い時代の教養をつんでいた結果とする説が見られる。

併し、(巻五)には記には用いられていない音仮名があり、これらの音仮名は(巻五)以外の『万葉集』では使用される事が少ない。これらは古い時代に百濟人が自國の地名或いは日本の地名・人名を記録をする時に使用されている。周・有・那・移」などがそれで(巻五)の表記者がこれらの音仮名を規範にしたと考えられる。(巻五)の音仮名にはかかる

特異な音仮名が見える。

という内容の文章になった。本学会の発表会は8月25日であるが6月8日に古事記学会で公開の講演会をしている。何となく学会がそのまま続いているような錯覚に陥って話が古事記学会の時の内容と交錯した感じがした。古事記学会で使った資料のことが不図頭を過った。その資料にもレジュメに記した同じ内容が書いてあった筈である。その資料内容が次々に頭に浮かんでくる。「万葉集巻五の万葉仮名を見る」と古事記に使っている文字を多く使っている。阿・意・斯などこれは巻五の筆録者が、時代的に古い教養を積んでいた結果であると言つ内容は実は日本古典文学大系萬葉集二(岩波書店刊行)の補注、巻五の「万葉仮名について」の一部分からの引用である。

従来この説について特別関心を持たず読み通していたが巻五の中に「阿」音仮名使用に注目しながら考察すると些か問題があるように考えられ古事記学会の時から検討の対象

としている。

(巻五)の筆録者は大伴旅人、山上憶良であろうと一般に言われている。両名が生存したのは旅人が665年、憶良が660年、733年と言われ同世代の人物で、共に見識高く日本を代表する知識人で「古い教養」を身に持った人物と考えられる。古事記は当然熟読していたであろう。であれば旅人も「ア」の音仮名使用に「阿」を多く使用していなければ理に合う説明にならない、と思われる。

この「古い教養」説による説明でなく別に「阿」の音仮名が(巻五)で多く使用される説明法を求めなければならぬと思われる。古事記の中では「ア」の音仮名には「阿」の漢字が多く使用されているが、「安」の漢字による漢字の使用は全くされていない。なぜそのような現象が生じたのか「古い教養」説では説明できないように思われる。新しい研究法を考案しなければならぬが古事記が大きな暗示を与えるように思われる。